

「生きがい」づくりは みんなの手で

老人福祉週間

かけ足でやっつけていく 高齢者社会

九月十五日は「敬老の日」。また、この日から一週間は「老人福祉週間」です。お年寄りは、これまで永年にわたって社会に貢献してこられました。長寿を心からお祝いとするとともに、今後も今日までつちかかってきた知識と経験を社会に役立てていただきたい

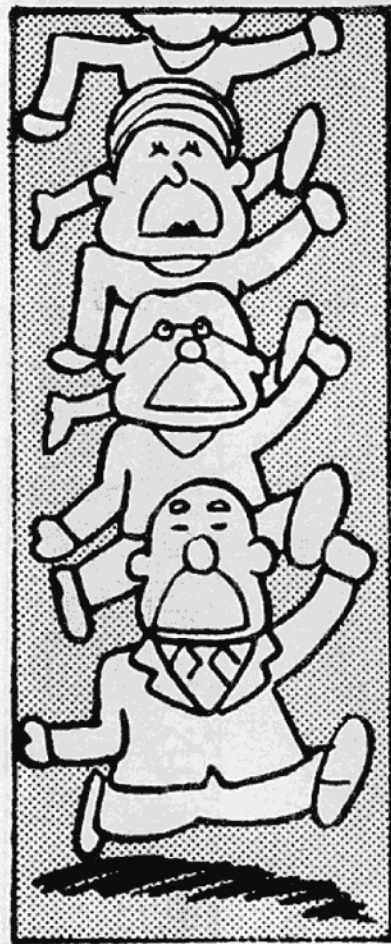
ものです。こうしたことが、お年寄りの生きがいになると同時に、世代を越えた新しいコミュニケーションの場にもなるのではないのでしょうか。老人に生きがいのある社会を、共に築いていきたいものです。

現在、わが国の六十歳以上のお年寄りは約千四百万人で、総人口の一二%を占めています。つまり、百人のうち十二人がお年寄りというわけですが、これが二十六年後の昭和八十年には、人口百人当たり二十人を超

えると予測されています。国民全体の二割が、六十歳以上のお年寄りということになるのです。わが国の場合「高齢者社会」へのテンポがいかに速いか、諸外国と比較すると一目りよう然です。たとえば、国民全体に占める六十歳以上の人口の割合が、八%から一八%に増えるまでの期間を比べると次のとおりです。

フランス	一七七年
スウェーデン	一〇三年
イギリス	五六年
ドイツ	五四年
日本	四〇年

つまり、フランスが百七十七年かかったところを、わが国は四十年で到達してしまうのです。それ



あるおばあちゃんは、毎朝掃除をすることが家庭の中の自分の役割と考え、何よりの生きがいと感じていました。ところが、ある日お嫁さんが「そんなことしなくていいの」と、掃除機を取り上げてしまったその日から、おばあち

家庭での役割分担を決める

お年寄りに生きがいを

は昭和七十年と予測されていますが、高齢者社会は文字どおり「駆け足」でやってこようとしているのです。ところで、昭和七十年に六十歳になる人、つまりお年寄りの仲間入りをされる方は、いま働き盛りの四十四歳です。お年寄りの福祉を進め、生きがいのある社会を築くことは、世代

毎月第三日曜日は 家庭の日

お年寄りを囲んだ
家族の対話を……

を越えた連帯の中で、私たち一人一人が、力を合わせて解決していかなければならない課題といえるでしょう。

やんは強度の便秘に悩まされ、とうとう寝こんでしまいました。それが、また掃除をさせてもらうようになってから、ウソのように便秘は治ったというのです。ある農家のできごとです。農繁期でネコの手も借りたいほどの忙しいとき、その家の老人は何かの役に立ちたいと田んぼに出て行ったのですが、「邪魔になるから引込んでいて」といわれ、明るる朝、自殺を試みたという事です。「何もしないでジツとしていればいいのかよ」という言葉が

ゴミを考え直そう



都市とゴミ

都市は生きています。しかも、巨大な生きものです。人間と同じに食物を食べ、排泄しています。パリ、ローマ、ジュネーブなどは世界でも美しい都市といわれていますが、毎日の排せつ作用は日光市とかわりありません。都市の排せつ物、つまりゴミ、各都市でもこの処理には工夫をこらし、それぞれに合った方法を実施しています。日光市も以前は、荷車で各家庭のゴミ箱からの直取り、次にステーションでの収集と、ゴミの増加に合わせて収集方